

算数科を中心とした提言（杜 威 先生）

平成30年度は下浜小学校、土崎小学校、将軍野中学校および勝平中学校を訪問させていただいた。いずれの学校においても、子どもたちの元気のよい挨拶、教室や廊下などの至る所にある掲示物などの校内環境の整備から、子どもたちの成長を願う先生方の創意や工夫が見られ大変感心した。

授業においては、T Tによる指導や個別活動、ペアやグループ活動が巧みに組み合わせられ、効果的に実施されていた。秋田市の小・中学校では、素晴らしい実践が蓄積されており、これらのよき経験を継承しながら、秋田市における算数・数学教育のレベルをさらに高めていくために考えられることを2点申し上げさせていただく。

- (1) グループ学習をより効果的に行うこと。秋田県の授業の基本とされる「秋田型の探究型授業」では、ペアワークやグループ活動が大きな割合を占めている。そこに、協同学習というキーワードがある。協同学習とは、児童生徒たちがともに学習課題に取り組むことにより、自分の学びと仲間の学びを最大限に高めようとする、小グループを活用した指導法であり、「肯定的相互依存」「個人の2つの責任」「促進的相互交流」などの基本要素が含まれている。つまり、仲間を尊重しながら各自の持つ力を最大限に出し合い、仲間同士が互いに依存し合うこと、自らの学びに責任を持ちながら、仲間の学びに対する責任を持つこと、メンバー同士の積極的な交流による学習効果の向上である。

協同学習を効果的に行うためには、グループの編成と配置に配慮する必要がある。学校現場での実践の蓄積に期待したい。一方、「ただ乗り」「社会的手抜き」「批判的精神の欠如」など、グループ活動の効果を阻害する姿が見られた場合は注意が必要である。社会的手抜きとは他人任せや力の出し惜しみのことであり、これらの阻害要因を排除することを大切にしたい。

- (2) 責任のある学習者を育成すること。これは学習者の主体性および深い学びの実現に関わることであり、上記グループ活動の効果を阻害する要因の排除の手立てにもなる。問題を解いたら先生に丸付けをしてもらったり、先生の用意した解答または教科書やドリルにある解答に照らし合わせて正誤を確認したり、グループの一部の子どもの発言等を一方的に鵜呑みにしたりするような場面を見かけることがある。理想的な活動は、子ども自身が学習活動を常にモニターし、常に根拠のある行動をする(計算する場合でさえも計算の意味や計算法則を拠り処にしながらかみ一つずつ行う)こと、できたところを自らに自信を持って保証し、できないところについてはなぜできないのか、必要な知識や技能を持っていないのか、持っているが課題とのつながりが分からないのか、加えて、持っているものをどのように活用したらよいか分かることである。これは、深い学びや思考力・判断力・表現力の育成につながり、引いていけばメタ認知をする力や批判的思考力の育成にもつながる。もちろん、このような態度や習慣、学習方法を身に付けることに時間が要するかもしれないが、根気強く取り組んでほしい。

参考引用文献

- ・三宮真智子編著、メタ認知 学習力を支える高次認知機能、北大路書房、2008
- ・楠見孝他編、批判的思考力を育む、有斐閣、2011
- ・安永悟他編、アクティブラーニングの技法・授業デザイン、東信堂、2016